

## 〔論文〕 マクシミリアン一世のプロパガンダと聖ゲオルギウス

### Saint George in the Propaganda of Maximilian I

田 中 圭 子

Keiko Tanaka

#### 序

1486年、ハプスブルク家のマクシミリアン一世は、選帝侯により神聖ローマ帝国のローマ王に選出された。神聖ローマ皇帝であった父フリードリヒ三世が1493年に没した後、ローマ王マクシミリアンは帝国における唯一最高の統治者となり、1508年に自ら発した皇帝宣言を通じて、「選挙されたローマ皇帝」の称号を名乗ることとなった。

同じ1508年、アウクスブルクの画家ハンス・ブルクマイルは、2点の木版画、すなわち甲冑を身に付けて馬にまたがり、竜を退治して生贄の王女を助け出す聖ゲオルギウスを描いたものと、同様に武装した騎馬のマクシミリアンを描いたものを制作している<sup>(1)</sup> [図1-2]。ブルクマイルは、その後マクシミリアンの注文を受けて多くの作品を手がけることとなる画家であり、この2点の木版画もマクシミリアンの意志、なかんずく政治的なそれを反映していると推察される。この場合は、まず皇帝宣言との関連、そして聖ゲオルギウスが異教徒の象徴たる竜と戦うことから、マクシミリアン自身の十字軍計画との関連が指摘されている<sup>(2)</sup>。さらに、複製可能な木版画というメディアは、その中に表現されたイメージや事柄をより多くの人々に伝える、ある種の宣伝という役割も果たした。この点を目的として木版画などを用いることを、広い意味でのプロパガンダ活動のうちに含めることができようが、マクシミリアンの周辺では、まさにその種の活動が盛んに行なわれていたのであった。

本稿は、そのような活動の中で生み出された表現の中に、聖ゲオルギウスというモチーフがいかに取り入れられていったか、まずこの点を検証しようとするものである。とくに、前述の2点の木版画が制作された皇帝宣言前後の時期、すなわち1507年から1508年にかけては、皇帝の称号を得ようとするマクシミリアンの側からのプロパガンダが活発に行なわれたと考えられるため、重点的に扱うこととしたい。また、聖ゲオルギウス・モチーフの検討に際しては、フリードリヒ三世が設立し、その後マクシミリアンが引き継いだ、この聖人の名を冠する騎士団についても目を向ける必要があるだろう。

ここで、マクシミリアンのプロパガンダ活動をめぐる研究の状況についても、簡単に触れておきたい。この君主の周辺において、その理想や政治的意志を表現し、伝達するという機能をもったと考えられるもの、換言すればプロパガンダのための媒体として認識しうるものは、もちろん木版画のみにとどまらない。印刷されたビラや小冊子、あるいは命令書といった各種の文書をはじめとして、演説、民衆歌、貨幣、木版挿画入りの書物、さらにマクシミリアンの墓廟のようなモニュメントまでが、政治的目的に利用されているのである<sup>(3)</sup>。これらの媒体のうち、例えば木版画や墓廟、あるいはマクシミリアン時代の貨幣に関しては、すでに個別的な専門



【図1】『馬上の聖ゲオルギウス』  
(ハンス・ブルクマイル、1508年)



【図2】『馬上のマクシミリアン一世』  
(ハンス・ブルクマイル、1508年)

研究がなされてきている<sup>(4)</sup>。だがそれらの研究においては、扱われている対象が持つ政治性はある程度認識されているとはいえ、プロパガンダとしての利用のされ方や表現を解明することを必ずしも主眼としているわけではない。その一方で、マクシミリアンの政治的宣伝活動を主題とする研究は、主としてビラなどの文書史料に基づいて行なわれ、その他の媒体に目が向けられることは少ないと言わなければならない<sup>(5)</sup>。よって、今後の研究においては、多様な媒体を用いて展開されてきたプロパガンダを総合し、一つの全体としてとらえる視角を導入することも必要であろう。こうした課題に応える一つの試みとして、本稿においては、聖ゲオルギウスというモチーフに限定してではあるが、従来の個別研究の成果に基づき、マクシミリアンの政治的宣伝に関わる活動を、可能な限り総合的にみてゆきたいと考えるものである。

# 1

本章では、まず聖ゲオルギウスについて、そしてこの聖人とマクシミリアンとの結び付きについて、概略を述べておきたい。

聖ゲオルギウス<sup>(6)</sup>は、中世キリスト教世界においてもっとも崇敬を受けた殉教者の一人だが、その生涯については知られるところが非常に少ないと言われる。カッパドキアに生まれて軍務に就いていた人物で、キリスト教信仰のゆえに殉教したとされ、伝承では、ペルシャの王あるいはディオクレティアヌス帝が、彼を殉教に至らしめた迫害者に擬されている。この聖人に対

する崇敬は、中世を通じて東方西方いずれにおいても浸透し、ギリシャ正教会では大殉教者の一人に数えられ、また西欧においては十四救難聖人の一人となり、王侯貴族から民衆層まで、広く受け入れられるに至った。

聖ゲオルギウス伝に取り込まれた様々な伝説のうち、もっとも人口に膾炙した挿話は、おそらく、この聖人が悪竜を倒して生け贄の王女を救い、それまで竜に苦しめられていた人々をキリスト教に改宗させる、というものであろう。このエピソードと、聖ゲオルギウスを竜を倒す戦士として描いた図像は、まず東方において現れ、12世紀頃、十字軍遠征の時代に西欧に移入されたと考えられている。聖ゲオルギウスは十字軍戦士たちの保護者とされ、数々の騎士団がその守護の下に創立された。

神聖ローマ皇帝フリードリヒ三世により1468年以前に創設され、1469年1月1日に教皇パウルス二世から承認を受けた聖ゲオルク騎士団 St. Georgsorden<sup>(7)</sup>も、そうした団体の一つである。また、これに先立つ1459年にフリードリヒと妃エレオノーレの間に嫡男が誕生したとき、その子の名前の候補の中には、コンスタンティヌス大帝の名と並んで聖ゲオルギウスの名も含まれていた。最終的には、ツィリで3世紀に殉教したといわれる聖マクシミリアヌスにちなむ命名に落ち着いたのであったが<sup>(8)</sup>、騎士団創設にしる我が子の命名に対する提案にしる、フリードリヒ三世の聖ゲオルギウスに対する特別な崇敬を証し立てるものではあるだろう。マクシミリアン自身、後にラテン語による自叙伝の草稿の中に、自らの命名をめぐるいきさつを書き留めている<sup>(9)</sup>。すなわち彼は、自らと聖ゲオルギウス、そしてこの聖人に象徴される十字軍という任務との結び付きを、まさに誕生のその時にまでさかのぼるものとして意識していた、あるいはそのようなものとして表現しようとしていたと言えるのである<sup>(10)</sup>。

そして、フリードリヒとマクシミリアンの聖ゲオルギウスに対する崇敬の表明は、東方におけるオスマン帝国の興隆とさらなる拡大という事態に直面した、西欧キリスト教世界の危機感の中でなされてきたものでもある。マクシミリアンの誕生はオスマン・トルコによるコンスタンティノープル攻略の6年後であり、両親がこの子供に対して偉大なキリスト教君主、異教徒討伐者たることを望んだのも無理からぬところであろう。さらに1450年代から70年代にかけて、オスマン・トルコはセルビア、ボスニアをはじめバルカンの大部分を支配下に入れるのである。トルコの脅威は、世襲領としてオーストリア、さらにその南に位置するケルンテン、シュタイアーマルク、クラインを治めるハプスブルク家の君主にとって、決して非現実的なものではなかった。フリードリヒが創設し、ケルンテンのミルシュタット、次いで下オーストリアのヴィーナー・ノイシュタットを拠点とした聖ゲオルク騎士団は、トルコの相次ぐ侵入に対する防衛において、人的・経済的基盤の欠如ゆえに、現実にはほとんど実効ある働きをなしえなかったと言われる<sup>(11)</sup>。しかし、これを引き継いだマクシミリアンは、自らの対トルコ十字軍構想に即して、この騎士団の拡大と再活性化を試みてゆくことになるのである<sup>(12)</sup>。

また、マクシミリアンとマリー・ド・ブルゴーニュ（マリア・フォン・ブルグント）との結婚によりハプスブルクに相続されることとなるブルゴーニュにおいても、十字軍の理想は君主ブルゴーニュ公とその宮廷に集う人々によって共有されていた。例えばマリーの曾祖父にあたるジャン無怖公<sup>ジャン・ブール</sup>は、無惨な敗北に終わりはしたが、1396年のニコポリス十字軍に参加している。その息、フィリップ善良公も自ら十字軍計画に手を染め、彼の設立になる金羊毛騎士団にも宗教的意義が与えられている<sup>(13)</sup>。マリーの父、シャルル突進公<sup>ル・テメシール</sup>もまた、帝国のローマ王の地位をめざす自身の政策の中に、十字軍の理想を織り込んでいた<sup>(14)</sup>。1473年にトリニアで行なわ

れたシャルルとフリードリヒ三世の会談は、対トルコ十字軍を目的として掲げつつ、ブルゴーニュとハプスブルクの結合の可能性をさぐるものであり、その延長線上にマリーとマクシミリアンの結婚が成立するのであった。

ブルゴーニュの伝統をも受け継いだマクシミリアンは、聖ゲオルク騎士団を、金羊毛騎士団を一つの模範とするオーストリアの騎士団として育てようとしていたとも考えられる<sup>(15)</sup>。例えば、聖ゲオルク騎士団に関連する内容を含むマクシミリアンの指示を書記官が清書して作成した1512年の文書には、ブルゴーニュの影響を示唆する一枚の素描が添えられている<sup>(16)</sup>。その中央に描かれているのは、聖ゲオルギウスの十字を描いた甲冑に身を固めたマクシミリアンと、その前にひざまずく書記官の姿である。画面左側、すなわちマクシミリアンの右側には笏を手にした二人の貴顕がおり、反対側にはマントをまとった聖ゲオルク騎士団員が二名、しかし彼らのマントには聖ゲオルギウスの赤い十字だけではなく、金羊毛騎士団の守護聖人たる聖アンドレアスのX型十字もまた付けられているのである<sup>(17)</sup>。

マクシミリアンが生涯を通じて保持した聖ゲオルギウスとのつながりの終着点は、彼の死と埋葬であった。1514年に作成された遺言書<sup>(18)</sup>では、彼は自らの埋葬の際、亡骸に「聖ゲオルギウスの赤い十字のついた白いダマスク織り」をきせかけるよう述べており、彼の墓所を維持する務めは聖ゲオルク騎士団に委ねられたようである。また、死の3週間足らず前、1518年12月30日深夜に口述された遺言<sup>(19)</sup>では、埋葬地はヴィーナー・ノイシュタットの聖ゲオルク教会と指示されている<sup>(20)</sup>。さらに、世襲領の各地に救貧院を建てて、それぞれに自身の像を置き、そこで「神を讃え、聖なる騎士ゲオルギウスを称えんがため、そして安らかなる余の記念のために」灯が献じられ続けることを望んでいるのである。

## 2

マクシミリアンと聖ゲオルギウスを結びつける接点は、何よりもまず、彼がトルコの脅威にさらされつつあるオーストリアの君主として、また信仰を守護して戦うべきキリスト教君主として担っていた、十字軍という任務のうちにあったのであり、この結合は、聖ゲオルク騎士団の存在によってさらに強化されるはずであった。本章では、マクシミリアンの十字軍計画と現実に展開された彼の政策の中で、この騎士団に与えられた役割について触れることとする。

十字軍計画へのマクシミリアンの具体的な関与は、まず1490年に教皇インノケンティウス八世のもと、ローマで開催されたトルコ問題に関する会議に提出された進軍計画に見出だされるという<sup>(21)</sup>。そして1493年8月の父帝フリードリヒ三世の薨去とほぼ前後して、ローマ王マクシミリアンは、トルコに対する十字軍の準備を開始するのである<sup>(22)</sup>。この時点において東方における対トルコ戦争が企てられたのは、一つには、1492年のハンガリーからの救援要請に続き、翌93年にはクロアチアがトルコに席卷され、隣接するクラインにも被害が及んだこと<sup>(23)</sup>、そしてマリー・ド・ブルゴーニュとの結婚（1477年）を通じてブルゴーニュとともにフランスとの敵対関係をも受け継いだマクシミリアンが、1493年になってフランス王シャルル八世との和平の見通しをつけたことにより、さしあたり西方での戦争から解放され、東方政策を展開するフリーハンドを得られたことによる。また、ローマ王にとっては、ここで異教徒トルコ人に対する十字軍を遂行してみせることができれば、皇帝戴冠の計画を前に、自身の威信を高める上でもかなりの効果が期待できたはずである。

その準備の一環として、マクシミリアンは聖ゲオルク騎士団を支えるための新たな組織、聖ゲオルク兄弟団 St. Georgsbruderschaft の創設を宣言している。彼の意図、あるいは期待は、1493年9月17日にインスブルックで公布された、兄弟団設立を承認する文書<sup>(24)</sup>の内容に、明らかに反映されている。この団体が目指す大目標は、文書冒頭に記されている通り「我らの正しき信仰の維持とトルコの暴威に対するキリスト教徒の防御」にあったわけだが、具体的な兄弟団設立のきっかけは、「年来のトルコの攻撃、そしてかつてのハンガリー王マーチャーシュの攻撃により深刻な事態の悪化を蒙った」聖ゲオルク騎士団からの請願にあったとされている。続いて述べられた規定によれば、この団体は男女両性の俗人により構成され、彼らの寄進により、トルコとの境界地帯に二千から三千の兵士を擁する、教会を備えた要塞が建設されることとなっていた<sup>(25)</sup>。また兄弟団員の多くの者が、各々の能力に応じ、自らの費用負担で信仰を守る戦いに参加するよう望まれてもいた。

つまりこの兄弟団は、まず第一に、トルコとの戦争にあたって、資金と人員の面で騎士団を支援するための組織として考えられていたといえる。さらに、兄弟団規定においては、兵たちの指揮官の任命権はオーストリア大公、すなわちハプスブルク家に留保されていた。この点が示している通り、この団体の軍勢はいわばハプスブルクの手兵でもあったのであり、その家門政策においても一定の役目を割り振られていたとみることができる<sup>(26)</sup>。とりわけ、ハンガリー王マーチャーシュによるオーストリア各地の占領と、1490年に彼が没した後、マクシミリアンにより遂行された占領地の奪回という戦いの記憶も新しい中、強化されようとしている聖ゲオルク騎士団は、ハンガリーに対する一種の圧力としても働かえた可能性がある<sup>(27)</sup>。

とまれマクシミリアンは、1493年10月、オーストリアから南方のクライン地方へと出兵した。だが、この年、トルコ軍はこれ以上の侵攻を行なうことはなく、マクシミリアンとしてもむなしく兵を返すよりほかなかった。翌1494年、トルコ軍は再びクロアチア、クラインに來襲する<sup>(28)</sup>。これを受けてローマ王による十字軍準備も続行され、聖ゲオルク兄弟団は、十字軍への参加を募る上での格好の枠組みとして利用されることとなった。つまり、この兄弟団への加入を通じて異教徒との戦いを支援するよう、ハプスブルク世襲領内にとどまらない、より広範な訴えが試みられたのである。1494年4月13日、この兄弟団は教皇アレクサンデル六世による認可を受けた<sup>(29)</sup>。そして、同年10月28日、全キリスト教徒に対してトルコの脅威を訴え、これに対抗するため兄弟団への加入を勧める内容の文書が出版されている<sup>(30)</sup>。マクシミリアンはその中で自ら兄弟団員となることを宣言し、同日、アントウェルペンの大聖堂にて、彼をこの団体の一員として迎え入れる儀式が挙行された<sup>(31)</sup>。この儀式において、マクシミリアンはミサの最中にいったん席をはずして甲冑を身に付け、その上から胸と背中に聖ゲオルギウスの十字をあしらった上衣をまとった姿で再び人々の前に姿を現したという<sup>(32)</sup>。

結果的には、トルコとの戦いのための遠征は、この年も実行に移されることはなく、聖ゲオルク兄弟団を通じての呼びかけも、むなしいものに終わったと言わざるをえない。これは、後述するように、このアピールが行なわれた1494年秋頃には、マクシミリアンの政策の力点が、もはや対トルコ十字軍には置かれていなかったことの当然の帰結でもあった。ただこのアピールを通じて、マクシミリアンについてのある一つのイメージが形成されていったとは言えることができる。武装し、白地に赤の十字を身に付けてキリスト教信仰のために戦わんとする、聖ゲオルギウスの騎士としてのイメージは、それ以後もマクシミリアン本人によって演じられ<sup>(33)</sup>、木版画などの中に繰り返し表され続けてゆくのである<sup>(34)</sup>。

1494年の時点において、マクシミリアンがトルコとの戦いを断念せざるをえなかったのは、この年の春にフランス王シャルル八世がイタリアへの進軍を開始し、イタリア半島における政治情勢が大きく変化したことによる。すでに前年11月にスフォルツァ家のビアンカ・マリアを二度目の妃とする婚約を成立させ、ミラノ公ルドヴィーコ・イル・モーロとの関係を強化して、イタリア政策における前進を図っていたマクシミリアンにとっては、フランス王のイタリア進出への対処が最優先すべき課題となって立ち現れてきたのである。その後ローマ王からは、トルコに対して全力を振り向けるのは、まさにフランスがイタリアを支配しようとしている今、あまりにも危険であり、まず、フランスという帝国にとってのもう一つの脅威を取り除いてより後、十字軍遠征に向かうべきである、という主旨の言説が帝国内に向けて表明されるようになる<sup>(35)</sup>。さらにマクシミリアンは、イタリア問題への対処とトルコ問題への対処を繋ぎ合わせ、連続した一つの政治的行動となそうとしていた<sup>(36)</sup>。すなわち、まず帝国軍を率いてイタリアに赴き、フランス王のイタリアにおける影響力を排除するとともに、ローマで教皇から帝冠を受けて、皇帝の称号を自らのものとする。そしてアドリア海を経由してバルカン方面へ向かい、トルコとの戦いに進発する、という計画を抱いていたと想定しうるのである<sup>(37)</sup>。その際、おそらくコンスタンティノーブルの奪還も、大目標として考えられていたであろう<sup>(38)</sup>。

この構想の中で、聖ゲオルク騎士団ならびに兄弟団も、新たなもう一つの任務を果たすことが期待されるようになる。すなわち、皇帝戴冠のためのローマ征行に随行する軍団としての任務である。次章では、皇帝戴冠と十字軍遠征を一つに連結しようとするマクシミリアンの構想と、その中で聖ゲオルク騎士団・兄弟団に与えられた役割をふまえた上で、皇帝戴冠の準備のためにコンスタンツで帝国議会が開催された1507年から翌1508年にかけて展開されたプロパガンダの諸相と、その中に現れる聖ゲオルギウスの表現について検討を加えてゆきたい。

### 3

コンスタンツ帝国議会<sup>(39)</sup>におけるマクシミリアンの目的は、1506年10月27日付けの帝国議会招集状<sup>(40)</sup>によれば、フランス王への対処と皇帝戴冠についての審議を行なうことであった。当時フランス王ルイ十二世は、ルドヴィーコ・スフォルツァを捕らえてミラノを占領し、ローマ王に迫って自らをミラノ公に叙任させていた。彼はヴェネツィアとともにマクシミリアンのイタリア政策の進展を警戒し、ローマに至るルートを事実上封鎖していたのである。これを突破して皇帝戴冠を実現するためには何よりも武力が必要であり、マクシミリアンは、帝国議会において、ローマ征行のための兵員と資金の援助、すなわち帝国援助に対する承認を帝国等族から得ようとしたのだった<sup>(41)</sup>。それゆえ、帝国議会では、マクシミリアン側より帝国等族に対する様々な働きかけが行なわれることとなったのである。

まず、帝国議会への招集状からして、読む者に対するプロパガンダ的効果を考慮して作成されたものとみなしうる。この命令書は、1506年初夏のハンガリー出兵に関する報告に始まり、現今の政治情勢、とくにイタリアをめぐるそれについての詳細な説明が続き、その中でイタリアにおける覇権のみならず帝冠をも手に入れんとするフランス王の脅威が強調されている。相当な長さをもつこの文書は印刷によって完成され<sup>(42)</sup>、版形もかなり大きい<sup>(43)</sup>。こうした命令書は、マクシミリアンの時代には封印を施さない状態で出されるようになり、それゆえ、帝国等族のみならず、より広範な層に読まれることを狙ったものとも推測されているのである<sup>(44)</sup>。

続いてマクシミリアンは、ローマに向けての自らの進軍計画を開陳し、これについての助言を求める内容の書簡を11月30日付けで作成させている<sup>(45)</sup>。

コンスタンツ帝国議会は、召集状に示された期日（2月2日）から3ヶ月近く遅れて、4月30日に開会した。参集した帝国等族の協力を得るために、マクシミリアンは彼らの前で自ら演説し、ドイツの威信のためにもフランスを退けて帝冠を獲得する必要があると訴えている<sup>(46)</sup>。これに加えて印刷された文書も用意され、そのうちの一つは件の演説と同様の内容を持つもの<sup>(47)</sup>、いま一つはマクシミリアンに仕えた学者ヨーゼフ・グリュンベックが著した、稀な気象現象や奇形児の誕生などを帝国の危機に対する警告と解釈する内容の小冊子であり、後者ははっきりと帝国等族を読み手と想定している<sup>(48)</sup>。マクシミリアン側から帝国等族に向けての文書攻勢はさらに続く。帝国議會を訪れていたフランス使節は、かねてより帝国等族をフランス側に引きつけるための活動を行なっていると目されていたが、マクシミリアン側の搜索により、彼がローマ王を非難する帝国等族向けの書簡と、こうした工作についてのフランス王の指示書を所持していたことが発見された<sup>(49)</sup>。マクシミリアンは、これを帝国等族の間に反フランス感情を高める好機とみて、フランス王の指示書を翻訳したうえで帝国議會にて朗読させ、続いてこれに反駁する文書をも作成させて公にしたのである<sup>(50)</sup>。

また、マクシミリアンのために歴史ならびに系譜学の研究を行なっていた学者、ヤーコプ・メンネルが著した『ハプスブルク年代記』も、1507年にコンスタンツで発行されている<sup>(51)</sup>。この冊子は、上述の諸文書のように政治情勢に直接関わるものではなく、ハプスブルクという家門の系譜を韻文形式で叙した作品である。これによれば、マクシミリアンの祖先は、フランク人なるメロヴィング家のクロヴィスを経て、トロイアのヘクトールの血を引くプリアムスにまで遡りうるといふ。この起源説は、後にマクシミリアンの周辺で木版画作品や著作の中に取り入れられ、幾度も表現されてゆくのだが、その嚆矢がこの『ハプスブルク年代記』であった<sup>(52)</sup>。これがまさに1507年という時点に出されたということは、この起源説の採用が、ハプスブルクの血統が帝位に相応しい高貴さを有していることを表すための、皇帝戴冠に向けてのプロパガンダの一環であったことを示している。

さらに、1507年以降、マクシミリアンの肖像画が、同一の原型に則って何点も制作されている<sup>(53)</sup> [図3]。そして、ここに表されたローマ王としてのマクシミリアン像、すなわち甲冑を身に付けて冠をかぶり、右手に笏、左手に剣を持った半身像は、体の向きなどにおいて若干の相違点はあるにしろ、グルディーナーと呼ばれる銀貨にも共通して用いられている。グルディーナー貨の場合は、表面のマクシミリアンの半身像を取り巻くようにローマ王の称号が刻印されており、それゆえこれは国王グルディーナー貨と名付けられている<sup>(54)</sup> [図4]。マクシミリアンのグルディーナー貨は、通貨として流通させるためではなく、専ら記念を目的として作成されたものであり<sup>(55)</sup>、肖像画ともども、例えば貴重な贈り物として用いられることにより、ローマ王の権威を示す手段として役立ちえたと考えられる。そして、後述するように、皇帝宣言以後はグルディーナー貨に刻まれる称号が変更され、マクシミリアンの新たな称号を知らしめ、記念するために利用されることとなるのである。

コンスタンツ帝国議会は、1507年7月26日付けで帝国最終決定<sup>(56)</sup>を出して閉会した。ここでマクシミリアンは、帝国等族からローマ征行のための援助に対する承認をとりつけることに、さしあたり成功している。帝国等族は、割り当てに応じて騎兵と歩兵をコンスタンツに派遣し、また12万グルデンの資金を負担することになったのである。コンスタンツ帝国議會での宣伝活



【図3】『マクシミリアン一世』  
(ベルンハルト・シュツリーゲルに基づく)



【図4】国王グルディーナー貨  
(表、ハル・イン・ティロール製)

動が一応の成果を収めたともみなせよう。しかし、その後マクシミリアンから督促状が出されたにもかかわらず<sup>(57)</sup>、実際には期日の10月16日までに約束された資金も兵員も集まらなかった。そのうえ、イタリアへの道もフランスとヴェネツィアによって閉ざされたままであり、身動きならないまま1508年を迎えたマクシミリアンは、2月4日にトリエントで自ら皇帝宣言を発するに至るのである。

その儀式の様子は、例えばフランクフルト市の代表として列席したヨハン・フロッシュの報告を通じて知ることができる<sup>(58)</sup>。これによると、大聖堂で挙行された式典への出席者は幾人かの帝国諸侯、多くの伯と使節たち、さらに聖ゲオルク騎士団員であった。そこではまず、グルク司教マテウス・ランクにより、マクシミリアンが帝権を受け、ローマ皇帝となることが宣される。続いて、聖ゲオルク騎士団員となった諸侯や騎士たちに対して、皇帝戴冠を助ける意志を持つかどうか問いかけられる。ローマ王の顧問官の一人が応答を行ない、彼はもちろん援助の遂行を約束している。

ここでなされた宣言は、皇帝戴冠によらずして皇帝の称号を帯びる旨を表明したものであったが、この儀式次第に明瞭に現れている通り、決して皇帝戴冠の断念を意味するものではなく、むしろ将来もその実現に向けて行動する、とのマクシミリアンからの意志表示としてとらえられるべきものである<sup>(59)</sup>。そして、帝国等族からの援助が思うように集まらない中、マクシミリアンが自身の十字軍計画の担い手とすべく梃子入れを図ってきた聖ゲオルク騎士団・兄弟団の意義が、相対的に大きくなっていることが窺える。すでにマクシミリアンは、コンスタンツ帝国議会閉会後に、皇帝戴冠実現のための具体的な方策を帝国等族に示した文書の中で、聖ゲオルク兄弟団をローマに随行させ、さらに異教徒との戦いに率いてゆくと述べていた<sup>(60)</sup>。トリエントの大聖堂で挙行された儀式は、本来十字軍を目的とする聖ゲオルギウスの軍勢を、皇帝戴冠と対トルコ十字軍を連続した一つの行動として実現しようとする構想の中に、あらためて位置付けようとする行為であると解釈されよう。また、この構想を抱き続けたマクシミア



ンにとっては、聖ゲオルギウスを模範とし、その旗のもとに十字軍に赴くことは、皇帝たることと不可分ととらえられていたと考えることができる。

このような考えをもっともよく反映した図像が、1508年にハンス・ブルクマイルが制作した2枚の木版画、『馬上の聖ゲオルギウス』と『馬上のマクシミリアン一世』であるといえよう[図1-2]。この図では、十字軍を暗示する聖ゲオルギウスは、足下に横たわる打ち倒された竜、彼の前にひざまずいて感謝を表す、子羊を連れた王女とともに描かれている。聖人の騎馬や兜、鎧を飾っているのは、聖ゲオルク騎士団の団員によって身に付けられていたとされる十字の表章である。一方、マクシミリアンはオーストリアの紋章を飾った馬に完全武装でまたがり、背景には皇帝宣言によって帯びたばかりの新たな称号<sup>(61)</sup>、そして帝権を象徴する双頭の鷲の紋章が描き込まれている。これらはほぼ同じ大きさの紙に印刷され<sup>(62)</sup>、背景には、未だアルプスの北側では稀であったルネサンス建築のモチーフを用いている。構図的には、やや斜め向きの聖ゲオルギウスに対して、マクシミリアンは完全に側面から表されており、若干の相違を見せているが、内容的には、まさに対をなす作品と言いうるであろう。皇帝マクシミリアンと聖ゲオルギウスは、この2作品において対置され、パラレルな存在として表現されているのである<sup>(63)</sup>。

さらに、ブルクマイルの木版画にみられるようなマクシミリアンの騎馬像は、皇帝宣言以後に作成されたグルディーナー貨にも取り入れられている。皇帝の称号を刻んだグルディーナー貨は、四分の一グルディーナー貨のような小さなものまで含めると10種以上残されており<sup>(64)</sup>、その中の一つが、前述の国王グルディーナー貨の表面の称号を王から皇帝に変更した、皇帝グルディーナー貨<sup>(65)</sup>である[図5]。そして、通常のグルディーナー貨のおよそ倍の重量を持つ、倍額記念グルディーナー貨<sup>(66)</sup>において、武装して騎乗するマクシミリアンを側面から描いた図像が、表面の意匠として登場する[図6]。ここでは、騎馬の皇帝は木版画とは逆の向きで表され、兜の上に冠を戴いている。右手に双頭の鷲の旗を持ち、馬を飾るのは聖アンドレアスの十字と火打石・火口金を組み合わせた金羊毛騎士団の表章である。こうした構図は、マクシミリアンがアウクスブルクの聖ウルリヒ＝アフラ聖堂内に建立しようとしていた、自身の石造騎馬像の計画にも受け継がれてゆく。1510年頃にこの像の草案となる素描を描いたのは、他ならぬブルクマイルであり、側面から見た騎馬像の台座の上に笏と十字架付き宝珠を置き、像の頭上に兜ではなく冠をかぶせることにより、皇帝の位を強調する構成となっている<sup>(67)</sup>。

また、別の記念グルディーナー貨<sup>(68)</sup>では、冠をかぶり、右手に双頭の鷲の紋章楯、左手に笏を持ったマクシミリアンの半身像が表面に表され、裏面には馬上で剣を振り



【図5】 皇帝グルディーナー貨  
(表、ハル・イン・ティロル製)



【図6】 倍額記念グルディーナー貨  
(表、ハル・イン・ティロル製、1508年)

上げ、倒れた敵を踏みしだきながら疾駆する皇帝の姿を見ることができる[図7]。その周囲には、双頭の鷲の紋章と、ハンガリー・ブルゴーニュ・ハプスブルク・オーストリアの四つの紋章楯も添えられている。この図像もまた、竜を退治する聖ゲオルギウスの姿との類似性を有するものといえる。ここではマクシミリアンは、先の倍額記念グルディーナー貨と同様、金羊毛騎士団の表章



【図7】記念グルディーナー貨  
(表・裏、ハル・イン・ティロル製、1508年)

を付けた馬に騎乗しているが、剣の力で敵を調伏する皇帝の身振りは、まさにブルゴーニュにおいても保持されていた十字軍の理想の体現者としてのそれであろう。

このような表現を通じて、皇帝となったマクシミリアンは、異教徒と戦い、キリスト教世界を守護する者としての聖ゲオルギウスに、イメージの中で近づけられていったといえる。もはや彼は、単に聖ゲオルギウスの守護のもとで戦おうとする騎士であるにとどまらず、聖人その人と重ね合わされ、そのイメージは木版画や貨幣のような、プロパガンダに適したメディアで表現されていったのであった。

## 結 語

以上みてきた通り、1507年から1508年にかけてのマクシミリアン陣営のプロパガンダ活動は、例えば反フランス意識を高めることを通じて、帝国内に向けて、とりわけ帝国等族に対して、ハプスブルクによる帝冠の確保に協力するよう働きかけること、その一方でローマ王ないし皇帝としてのマクシミリアンの威厳あるイメージの形成を促進することを目指し、文書・肖像画・貨幣・木版画といった手段を用いて展開された。その中に、聖ゲオルギウスの、あるいはこの聖人とマクシミリアンのつながりを暗示するような図像モチーフが現れるのは、1508年の皇帝宣言を契機としてのことであったといえよう。しかし、これは必ずしも唐突なことではなく、すでにマクシミリアンは、現実にはトルコの脅威が迫る中で、これに対抗するための十字軍を計画し、その担い手たるべき聖ゲオルク騎士団を強化する試みを行なってきた。さらに、この騎士団と新たに創設された兄弟団は、十字軍への参加と支援を呼びかける宣伝の手段としても利用されており、これに関わる儀式では、マクシミリアンは自ら聖ゲオルギウスの騎士として装い、この聖人への帰依と十字軍という任務に対する決意を演出してみせていたのである。

また、十字軍をキリスト教君主のつとめとみなす観念、それに基づく聖ゲオルク騎士団・兄弟団の存在に加えて、ローマにおける皇帝戴冠とトルコに対する十字軍遠征を一つに連結して実現させよう、という独自の構想が、皇帝マクシミリアンと聖ゲオルギウスを結び付ける、いま一つの回路として働きえた、と指摘しておきたい。十分な帝国援助を得ることが困難な状況下で、聖ゲオルク騎士団はローマ征行を支える兵力と位置付けられ、皇帝戴冠の後この騎士団とともに十字軍遠征に向かうとされたマクシミリアンには、聖ゲオルギウスのイメージがはっ

きりと重ね合わされた。この聖人に象徴される十字軍の理念は、マクシミリアンの抱いていた皇帝についての観念において、不可欠の一部であったと言えるであろう。

現実には、1494年以降、オスマン・トルコのハプスブルク世襲領への圧迫が小休止状態となったこともあずかって、十字軍遠征はマクシミリアンにとって生涯果たせぬ目標にとどまった。家門政策を追求するための便利なスローガンとして十字軍を利用した、とみなされる所以であり、これを完全には否定しえない側面があることもまた事実であろう。聖ゲオルク騎士団はマクシミリアン没後も存続したものの、活躍の場をもちや見出だすことができず、1598年にフェルディナント二世により解体され、その財産はイエズス会に譲渡されている<sup>(69)</sup>。1526年のモハーチのカタストロフィ以後、オスマン・トルコとの戦いはまさにハプスブルクにより担われてゆくことになるのだが、そこで聖ゲオルギウスという象徴が何らかの役割を持ちえたのか否か、ここではもはや詳らかにしえない。この点に関しては、また別個の研究が用意されなければならないであろう。

## 註

- (1) Tilman Falk, *Hans Burgkmair. Studien zu Leben und Werk des Augsburger Malers* (München 1968), S.71f., Nr.42-43; *Kunst um 1492. Hispania-Austria. Die Katholischen Könige, Maximilian I. und die Anfänge der Casa de Austria in Spanien* (Milano 1992), S.351f., Nr.164-165.
- (2) *Kunst um 1492*, S.352.
- (3) Cf. Edeltraud Hönig, *Kaiser Maximilian I. als politischer Publizist* (Phil. Diss. Graz 1970), S.13-27.
- (4) 木版画や墓廟を含む、マクシミリアン周辺の視覚芸術作品全般に関しては、さしあたり註(1)にあげた展覧会カタログ (*Kunst um 1492*) を参照されたい。貨幣については、註(54)にあげた文献を参照。
- (5) Peter Diederichs, *Kaiser Maximilian I. als politischer Publizist* (Phil. Diss. Heidelberg 1931); Georg Wagner, "Maximilian I. und die politische Propaganda," in: *Ausstellung Maximilian I. in Innsbruck* (Innsbruck 1969), S.33-46; Hönig, *op. cit.*
- (6) 聖ゲオルギウスに関しては、Sigrid Braunfels-Esche, *St. Georg - Legende, Verehrung, Symbol* (München 1976); B. Kötting, *Lexikon für Theologie und Kirche*, Bd. 4 (Freiburg i. B. 1960, 2.Aufl. 1986), S.690-692; Wolfgang Haubrichs, *Theologische Realenzyklopädie*, Bd. 12 (Berlin - New York 1984), S.380-385; ヤコブス・デ・ウォラギネ、前田敬作・山口裕訳『黄金伝説』第2巻 (人文書院 1984年)、75-88頁。
- (7) Gertrud Gerhartl, "Der St. Georgs-Ritterorden," in: *Ausstellung Friedrich III. Kaiserresidenz Wiener Neustadt* (Wien 1966), S.368-370; Heinrich Koller, "Der St.-Georgs-Ritterorden Kaiser Friedrichs III.," in: *Die geistlichen Ritterorden Europas* (Sigmaringen 1980), S.417-429.
- (8) Heinrich Fichtenau, *Der junge Maximilian (1459-1482)* (Wien 1959), S.8. ツイリ (ツェリエ、現スロヴェニア) は、当時トルコに脅かされていたシュタイアーマルクに位置しており、その意味でこれもトルコとの戦いに関係のある名だといえる。
- (9) Kaiser Maximilian I., "Fragmente einer lateinischen Autobiographie Kaiser Maximilians I.," in: *Jahrbuch der Kunsthistorischen Sammlungen des Allerhöchsten Kaiserhauses* 6 (1888), S.423.
- (10) 聖ゲオルギウスとマクシミリアンの生涯にわたる結び付きと、これについての様々な表現に関しては、次の文献に網羅的にまとめられている。Walter Winkelbauer, "Kaiser Maximilian I. und St. Georg," in: *Mitteilungen des Österreichischen Staatsarchivs* 7(1954), S.523-550.
- (11) 騎士団への加入者数は多かったとはいえ、また当初ミルシュタットに置かれた騎士団をヴィーナー・ノイシュタットに移し、当地の司教区と統合することにより財政問題の解決が図られたが、これはただ司教と騎士団側の軋轢を生んだのみであった。Koller, *op. cit.*, S.422-426.

- (12) Winkelbauer, op. cit.; Josef Plösch, "Der St. Georgsorden und Maximilians I. Türkenpläne von 1493/94," in: Helmut J. Mezler-Andelberg (Hrsg.), *Festschrift Karl Eder zum 70. Geburtstag* (Innsbruck 1959), S.33-56; Inge Wiesflecker-Friedhuber, "Maximilian I. und der St.-Georgs-Ritterorden," in: Herwig Ebner u.a. (Hrsg.), *Forschungen zur Landes- und Kirchengeschichte. Festschrift für Helmut J. Mezler-Andelberg zum 65. Geburtstag* (Graz 1988), S.543-554.
- (13) Joseph Calmette, *Die großen Herzöge von Burgund* (München 1963, 4.Aufl. 1976), S.196-199, 274-275. 金羊毛は、元来は黄金の羊の毛皮を求めて航海する異教の英雄イアソンを暗示するものであったが、シャロン司教ジャン・ジェルマンにより、旧約聖書に登場する、神が露を置き給うたギデオンの羊毛と解釈されるようになった。
- (14) Emil Dürr, "Karl der Kühne und der Ursprung des habsburgisch-spanischen Imperiums," in: *Historische Zeitschrift* 113 (1914), S.52f. ; Fichtenau, op. cit., S.24, Anm.39.
- (15) Winkelbauer, op. cit., S.540; Wiesflecker-Friedhuber, op.cit., S.548f.
- (16) Wien, Österreichische Nationalbibliothek, Cod.2835, fol.26v.
- (17) 聖ゲオルギウスと聖アンドレアスを対置する表現は、マクシミリアンの死に際して1519年に制作されたハンス・シュプリングクレーの木版画にもみられる。そこでは皇帝マクシミリアンが聖母と6人の聖人たちにより全能の神にひきあわされているが、2人ずつ列をなして並ぶ聖人たちの中で、聖母に次ぐ位置を占めるのは聖ゲオルギウスと聖アンドレアスである。Jeffrey Chipps Smith, *Nuremberg, a Renaissance City, 1500-1618* (Austin 1983), p.157, no.57.
- (18) この遺言書は、聖ゲオルク騎士団に関する部分の抜粋という形で残されている。そのテキスト全文は、Karl Schmid, "'Andacht und Stift'. Zur Grabmalplanung Kaiser Maximilians I.," in: Karl Schmid /Joachim Wollasch (Hrsg.), *Memoria: der geschichtliche Zeugniswert des liturgischen Gedenkens im Mittelalter* (München 1984), Anhang I, S.772-776.
- (19) Inge Wiesflecker-Friedhuber (Hrsg.), *Quellen zur Geschichte Maximilians I. und seiner Zeit* (Darmstadt 1996), S.289-295, Nr.82.
- (20) 現在もマクシミリアンはこの教会に埋葬されているが、彼の墓廟のために鑄造された多くのブロンズ像はそこに安置することができず、のちにインスブルックの宮廷教会に置かれることとなった。
- (21) Hermann Wiesflecker, *Kaiser Maximilian I.*, 5 Bde (Wien 1971-1986), Bd.1, S.346f.
- (22) 1493/94年の十字軍計画については、Hermann Wiesflecker, "Maximilians I. Türkenzug 1493/94," in: *Ostdeutsche Wissenschaft. Jahrbuch des Ostdeutschen Kulturrates* 5 (1958), S.152-178; Plösch, op. cit.
- (23) Wiesflecker, "Maximilians I. Türkenzug," S.160-162.
- (24) Wiesflecker-Friedhuber (Hrsg.), op. cit., S.56-60, Nr.13.
- (25) 要塞の位置は、同文書中でマクシミリアンによりクライン地方のラーンと定められたが、その建設は実現しなかった。
- (26) Winkelbauer, op.cit., S.530f.; Plösch, op. cit., S.45ff.
- (27) 但し、実際には、マクシミリアンの努力にもかかわらず、聖ゲオルク騎士団はそれほど強力な組織にはなりえなかったと推測される。
- (28) Wiesflecker, "Maximilians I. Türkenzug," S.170-172.
- (29) Plösch, op. cit., S.46.
- (30) この文書は14頁からなり、ドイツ語版とラテン語版が残されている。Diederichs, op. cit., S.36f., 108, Nr.9.; Plösch, op. cit., S.50-52; Wiesflecker-Friedhuber, op. cit., S. 545. さらに同年11月15日にも、アントウェルペンにおいて兄弟団への支援を呼びかけるピラが出されている。Plösch, op. cit., S.52; Wiesflecker-Friedhuber, op. cit., S.546-547.
- (31) Wiesflecker, *Kaiser Maximilian I.*, Bd.1, S.386.
- (32) Wiesflecker-Friedhuber, op. cit., S.546.
- (33) 1503年12月8日、マクシミリアンは甲冑の上に白いマントをまとい、胸に赤い十字をつけた姿でウルムに入城した。1502年から1503年にかけては十字軍熱が人々の間で高まりを見せた時期であり、シュヴァーベンでも聖ゲオルギウス会 St. Georgs-Gesellschaft なる組織が結成されている。ウルムへの入城は、この会に関係のあるものようである。Wiesflecker-Friedhuber, op. cit., S.547.

- (34) マクシミリアン自身の経験を物語化した『トイアーダルク』の末尾に添えられた木版挿画など。Kaiser Maximilian I., *Theuerdank* (Dortmund 1979), S.555. また大型木版画『マクシミリアン一世の凱旋門』の中にも聖ゲオルク騎士団に関する表現が含まれる。“Ehrenpforte des Kaisers Maximilian I.,” in: *Jahrbuch der Kunsthistorischen Sammlungen des Allerhöchsten Kaiserhauses* 4 (1886), Supplement. (Nachdruck, Unterschneidheim 1972), fol.17-18.
- (35) 例えば、ヴォルムス帝国議会（1495年3月～8月）に合わせて、マクシミリアン陣営から帝国等族に向けて出された文書『ハンス・フォン・ヘルマンスグリューンの夢』にみられる。Hermann Wiesflecker, “Der Traum von Hermansgrün, eine Reformschrift aus dem Lager des Königs Maximilian I.,” in: Helmut J. Mezler-Andelberg (Hrsg.), *Festschrift Karl Eder zum 70. Geburtstag* (Innsbruck 1959), S.13-32.
- (36) 1494年11月24日付けのヴォルムス帝国議会への招集状では、帝国等族に対して、武装して帝国議会に参集すること、議会閉会後はイタリアへ進軍し、その後対トルコ遠征に向かうことが要請されている。Ibid., S.23.
- (37) Wiesflecker, *Kaiser Maximilian I.*, Bd.2, S.155.
- (38) マクシミリアンはコンスタンティノープルの紋章をも帯びる、との「マクシミリアン一世の紋章書」草稿（1507年成立）の記述から、そうした目標設定を読み取りうる。「紋章書」については、拙稿「マクシミリアン一世と紋章学」、『史境』29（1994年）、108-121頁。
- (39) コンスタンツ帝国議会に関しては、Gertraud Ibler, *König Maximilian I. und der Konstanzer Reichstag von 1507* (Phil. Diss. Graz 1961) ; Wiesflecker, *Kaiser Maximilian I.*, Bd.3, S.354-379.
- (40) エスリンゲン市長および参事に宛てられた帝国議会招集状のテキストは、Johannes Philippus Datt, *Volumen rerum germanicarum novum, sive de pace imperii publica libri V* (Ulm 1698), S.562-567. 他の帝国等族に対しても同様の命令書が発送されたと考えられる。
- (41) マクシミリアンにとって、帝国援助の獲得は必ずしも容易なことではなかったといえる。ローマ王と帝国等族との間で帝国国制をめぐる対立が展開された帝国議会において、王権の強化と権威の増大につながる可能性のある政策への援助は、帝国等族にとって承認しがたいものであったからである。
- (42) 命令書の宛名の部分は空白のまま印刷され、後から手で書き加えられたと考えられる。命令書の起草は書記局で行なわれ、コンスタンツ帝国議会の招集状では、宮廷書記長ツィプリアン・フォン・ゼルンタインが署名をしている。印刷された命令書の部数については、アウクスブルクでマクシミリアンの意を受けて働いていた人文学者、コンラート・ポイティンガーに向けて出された皇帝の書簡（1518年3月16日付）が情報を与えてくれる。「…余マクシミリアンは、ここに、汝の見ての通り、命令書の写しを一通送るものである。そして、その写しの内容に従い、日付を入れず、丹念に300部を印刷させるよう、汝に委ねる。（刷り上がった命令書は）余がさらに通知をするまで汝の手元に保管すること。…」Erich König (Hrsg.), *Konrad Peutingers Briefwechsel* (München 1923), S.299-300, Nr.187.
- (43) およそ半メートルに及ぶといわれる。Diederichs, *op. cit.*, S.13, 47-48, Nr.43.
- (44) Wagner, *op. cit.*, S.39; Hönig, *op. cit.*, S.130-133.
- (45) Johannes Janssen (Hrsg.), *Frankfurts Reichsrespondenz nebst anderen verwandten Aktenstücken von 1376-1519*. Bd.2 (Freiburg i. Br. 1872), S.697-699, Nr.896. この書簡の具体的な宛先はほとんど知られていないが、少なくともフランクフルト市当局によって受け取られている。
- (46) 演説の内容については、Johann Joachim Müller (Hrsg.), *Des Heil. Römischen Reichs Teutscher Nation, Reichs-Tags-Staat von ANNO MD. biß MDIIX. So wohl unter Keyzers Maximiliani I selbsteigener höchsten Regierung* (Jena 1709), S.549-553.
- (47) Diederichs, *op. cit.*, S.49, Nr.46; Hönig, *op. cit.*, S.133-134.
- (48) 「或る時、キリストと神聖なる帝国の敵に対し武器をとるべく警告する全能の神のお告げとして帝国に出現した、奇妙なる不可思議な前兆、また驚くべき赤子の誕生についての新しき解釈。コンスタンツ帝国議会に参集したすべての選帝侯と諸侯に、尊敬すべき司祭ヨーゼフ・グリェンベック氏より贈る。」Johann Friedrich, *Astrologie und Reformation* (München 1864), S.64f.; Albin Czerny, “Der Humanist und Historiograph Kaiser Maximilians I. Josef Grünpeck,” in: *Archiv für Österreichische Geschichte* 73(1888), S.334.
- (49) この事件に関しては、Ibler, *op. cit.*, S.70-77; Wiesflecker, *Kaiser Maximilian I.*, Bd.3, S.368-370.
- (50) ドイツ語に訳されたフランス王ルイ十二世の指示書は、Müller (Hrsg.), *op. cit.*, S.566-575. マクシミリアン

- ン側よりの反駁書は、*Ibid.*, S.576-612.
- (51) Jakob Mennel, *Chronica Habsburgen[sis] nuper rigmatice edita* (Konstanz 1507), Wien, Österreichische Nationalbibliothek, 38.R.2.
- (52) 拙稿『『マクシミリアン一世の凱旋門』における帝権と王朝のイメージ』、『西洋史学』182 (1996年) 1-16頁。特に9-14頁参照。
- (53) 原型となる肖像を描いたのは、ベルンハルト・シュトリーゲルであると考えられており、これに基づく肖像画のうち、早期の作例としては、1499年の年記を持つものがある。*Ausstellung Maximilian I. in Innsbruck* (Innsbruck 1969), S.148, Nr.547. 筆者が文献を通じて確認し得た限りでは、1507年に成立したものが一点、1507年以後の制作と推定されているものが四点あるが、この他にも何点か存在しているようである。Gertrud Otto, *Bernhard Strigel* (München - Berlin 1964), S.101, Nr.55-56; *Katalog der Gemäldegalerie. Porträtgalerie zur Geschichte Österreichs von 1400 bis 1800* (2.Aufl., Wien 1982), S.54-55, Nr.12-14.
- (54) Erich Egg, *Die Münzen Kaiser Maximilians I.* (Innsbruck 1969), S.114-119; *Das Bildnis Kaiser Maximilians I. auf Münzen und Medaillen* (Innsbruck 1992), Nr.1-5, S.43-44.
- (55) Günther Probst, *Österreichische Münz- und Geldgeschichte*, Teil 2 (Wien - Köln - Weimar 1973, 3.Aufl. 1994), S.372, 374.
- (56) 帝国最終決定のテキストは、Datt, *op. cit.*, S.557-560.
- (57) 1507年8月3日付け。Diederichs, *op. cit.*, S.50-51, Nr.48; Hönig, *op. cit.*, S.137-138.
- (58) Janssen (Hrsg.), *op. cit.*, S.742-744, Nr.933. その他の史料も合わせて、皇帝宣言の式典の再現を試みているのが、Hermann Wiesflecker, "Maximilians I. Kaiserproklamation zu Trient (4. Februar 1508). Das Ereignis und seine Bedeutung," in: *Österreich und Europa. Festgabe für Hugo Hantsch zum 70. Geburtstag* (Graz-Wien-Köln 1965), S.19-25.
- (59) Cf. *Ibid.*, S.26-30. 皇帝戴冠直後、2月8日付けの命令書によれば、「…余がまさに教皇による戴冠を、余の兵力の少なさと、いかなるローマ王も遭わなかったほどの大きな抵抗のために、今回は果たすことができないとしても、…それゆえに余と栄えあるドイツ人がローマ帝権を奪われるようなことがあってはならないのだ。そうではなくて、余は今、…戴冠を受けることはつねに可能であろうとの希望と決意とをもって、選挙されたローマ皇帝の称号を身に帯びたのである。…余は現在そして未来において、神が余に命と活力を与えてくださる限り、すすんで皇帝の称号を満足のゆく形で手に入れんとするであろう。…」Datt, *op. cit.*, S.568-570.
- (60) Janssen (Hrsg.), *op. cit.*, S.739-741, Nr.924. 1507年7月26日以後、コンスタンツでマクシミリアンにより出された文書。
- (61) IMP(ERATOR) CAES(AR) MAXIMIL(IANVS) AVG(VSTVS).
- (62) 『馬上のマクシミリアン一世』は323×227mm、『馬上の聖ゲオルギウス』は325×230mm。Kunst um 1492, S.351f., Nr.164-165.
- (63) 実際には、これらの木版画はマクシミリアン当人の注文によるものではなく、彼と親しい人文学者、ポイティンガーが依頼して制作されたものと考えられている。しかし、その図像内容はマクシミリアンの構想とよく合致しており、1517年から1518年にかけて行なわれた、マクシミリアン最後の十字軍プロパガンダにおいても活用されたほどである。『馬上のマクシミリアン一世』は、その際年記を1518に変更して用いられた。 *Ibid.*; Falk, *op. cit.*, S.70f.
- (64) Egg, *op. cit.*, S.120-121, 124-129, 150-157; *Das Bildnis Kaiser Maximilians I.*, S.45-54, Nr.6-9, 13-16, 18-22, 25-36.
- (65) Egg, *op. cit.*, S.120-121; *Das Bildnis Kaiser Maximilians I.*, S.45-46, Nr.6-9.
- (66) Egg, *op. cit.*, S.156-157; *Das Bildnis Kaiser Maximilians I.* S.53-54, Nr.34-36. この銀貨は、1508年に皇帝の使節により、ヴェネツィア共和国の高官たちに配られたという。 *Ibid.*, S.33.
- (67) Kunst um 1492, S.355, Nr.168. この騎馬像は結局完成しなかった。マクシミリアンの騎馬像に関しては、次の文献も参照。Larry Silver, "Shining Armor: Maximilian I as Holy Roman Emperor", in: *Museum Studies -Chicago-* 12-1(1985), pp.8-29.
- (68) Egg, *op. cit.*, S.152-153; *Das Bildnis Kaiser Maximilians I.*, S.51, Nr.27-29.
- (69) Koller, *op. cit.*, S.428.

図版出典

- [図 1 - 2] Tilman Falk, *Hans Burgkmair. Studien zu Leben und Werk des Augsburger Malers* (München 1968), Nr.42-43.
- [図 3] *Katalog der Gemäldegalerie. Porträtgalerie zur Geschichte Österreichs von 1400 bis 1800* (2.Aufl., Wien 1982), Nr.13 (Abb.19).
- [図 4 - 7] *Das Bildnis Kaiser Maximilians I. auf Münzen und Medaillen* (Innsbruck 1992), Nr.1, 6, 34, 28.